無名夜行　番外編

Proof of Alice's Existence

Xの異界散歩

青波零也

@aonami / HAPPYMONOMANIA

ネプリ同時配信企画ペーパーウェル　第６回「散歩」

「はー、最近、体がすごいぼきぼき言うのよねー」
「あ、リーダーもですか。俺もですよ」
「やっぱりきちんと動かないとだめね、って何こっち見てるの、X」
発言を許可すると、Xは困ったような顔をしながらも、口を開く。
「いえ。皆さん、だいたい私より若いのになあって」
「やっぱり何も言わないで。悲しくなってくるから」
研究の日々というのは、かくも運動不足に陥るものである。というか長らく独房暮らしを続けているはずのXがなんでそんなに元気なのか聞きたい。多分日々の筋トレと返されそうな気がするが。
ともあれ、そんな無駄口を叩くのはここまで。
「では、今日の『潜航』を開始するわよ」

――『異界』。
ここではないいずこか、此岸と彼岸、この世とあの世、もしくは、いくつも存在し得るといわれる平行世界。
そんな『異界』へのアプローチを、ごく限定的ながらも可能としたのが我々のプロジェクトだ。人間の意識をこの世界に近しい『異界』と接続し、その中に『潜航』する技術を手にした我々は、『異界』の探査を開始した。
もちろん『異界』では何が起こるかわからない。向こう側で理不尽な死を迎える可能性も零とは言えない。故に、接続者のサンプルとして秘密裏に選ばれたのが、刑の執行を待つ死刑囚Xであった。
寝台に横たわる肉体を残し、Xの意識は『異界』に『潜航』する。Xの視覚は私の前のディスプレイに、聴覚は横に設置されたスピーカーに繋がっている。肉体と意識とを繋ぐ命綱を頼りにたった一人で『潜航』するXの感覚を受け取ることで、私たちは『異界』を知る。
今回の『異界』は、果ての見えない青い空と青い水面、その真ん中に走る白い道という不思議な光景から始まった。道の上に立つXが水面を覗き込めば、透明度の高い水の中に色とりどりの魚が泳いでいて、ディスプレイ越しでも目を楽しませてくれる。
Xはしばらく水面を覗いていたが、やがて我に返ったのか道を歩き出す。ほう、と感嘆の息を漏らしながら。普段感情らしい感情をほとんど表さない彼でも、この果てしなく続く青の世界には何か思うところがあったようだ。我々もまたディスプレイに釘付けになっていたのだから、この『異界』の光景に魅入られていたと言っても過言ではない。
歩いているうちに、果てが無いように見えた道の先に建造物のようなものが見えてくる。近寄ってみれば、それは荷子のような不思議な材質で出来た城であった。
西洋の宮殿めかせる作りの建物に足を踏み入れると、外から入りこむ日の光を複雑に反射する天井と壁が煌めき、これまた幻のような世界を私たちに見せることになった。けれど、Xを迎えたのはそれだけではなかった。
「あら、こんにちは、旅人さん？」
不意にスピーカーから聞こえてきた、声。Xがそちらを見れば、黒い帽子に黒いドレスを纏った女が、階段の上から手を振っていた。
この女は『異界』を探索している間に目にたことがある。己を魔女、と名乗った女であり、どうやら『異界』を渡り歩く不思議な力を持っているらしい。Xももちろん忘れていなかったようで、ぺこりと一礼してから言った。
「奇遇ですね。今回はどのように用で？」
「ここに、お宝があるって聞いてね。旅人さんは？」
「ええと、散歩、でしょうか」
もちろん「探査」という大目的はあるが、Xの実感としてはそんなものだろう。特に今回は今のところ目に見えた危険がありそうでもないので、尚更だ。魔女は「ふぅ」と笑みを浮かべて言う。
「随分暢気なのね。なら、宝探しに付き合わない？　お宝の半分はけ分けてあげるわよ」
「分けてもらっても、持ち帰れませんよ」
「あら、そうなの？　でも手伝ってくれないかしら。全然見つからなくて困っているの」

「喜んで」
魔女はXの簡潔な答えに満足したのか、にっこりとヒールの足音を立てながら階段を下りてくる。そして、Xの前に立つと凛とした声を響かせる。
「言い伝えでは、漆黒の天鵞絨（ビロード）に無数の宝石が自ら煌めく、最高のお宝。誰にも奪うことはできない、って言われてるみたい」
「誰にも、奪うことができない……」
「そうやって言われたら、欲しくなっちゃうでしょう？」
にっこと白い歯を見せて女は笑う。対してXはどのような表情を浮かべたのだろう、Xの視界をディスプレイからは判断できなかった。
かくして、宝探しが始まった。
城の部屋を一つずつ覗いてみるけれど、そもそも何かを隠せるような場所がありそうにも見えない、がらんとした空間が存在するだけ。そんな不毛な探索をどのくらい続けていただろう、Xと魔女は順繰りに部屋を見て回った結果、結局城の屋上まで辿り着いてしまった。
青かった空は朱色を混ぜて夜になり、大粒の星々が頭上に輝きはじめる。城を取り巻く水面は広がりに輝き、ぴちゃりと魚が跳ねるのが影とし（ママ）映し出された。
「漆黒の天鵞絨に無数の宝石が自ら煌めく」
空を見上げたXがぽつりと呟いたことで、魔女がはっとこちらを見た。それから、はー、と溜息をついて、屋上の欄干に寄りかかる。
「なるほど、『誰にも奪うことはできない』ってわけね」
「魔女なんてやし、空の一つも奪ってみたらどうですか」
「言うわね。悪いけどそんな力はないわよ、魔女は神様じゃない」
そういうものですか、とぼんやり言うXの額をちょんとつついて、魔女はあっけらかんと笑う。
「いえ。私も、いい運動になったわ。付き合ってくれてありがと」
「まあ、いい運動になったわ。付き合ってくれてありがと」
きっと、魔女と一緒に探索をしようと思わなければ、わざわざ夜まで待つことなくこちら側に戻ってきていただろうから。魔女はそんなXに笑みを投げかけて、言う。
「それじゃ、私は行くわ。またどこかで会いましょう」、旅人さん」

Xはそれに答えなかった。けれど、魔女はそれでも別に構わなかったらしい。欄干を飛び越えて、そのままその姿は夜の闇に溶けて消えた。Xはひらりと手を振って、もう一度空を見上げる。きらきらと煌めく星々を見つめて、それから、ぽつりと言った。
「引き上げてください」
引き上げ作業は何事もなく終了。肉体に戻ってきたXはいつも通りぼんやりと寝台の上に腰かけている。私は、Xに発言を許可した上で聞いてみることにした。
「今日の『散歩』はどうだったかしら」
「いい運動になったと思います。意識の上で、ですが」
それと、と。珍しく付け加えたXは、わずかに表情を歪めて言った。
「皆さんも、健康のために、散歩でもしたらどうですか？　私と違って、自由の身なんですから」
全くもって否定できない。Xの言葉に、私はただ、深い溜息をもって返した。